



Title	第11回臨床哲学フォーラム共催イベント 研究フォーラム「語り継ぐ、水俣と表現」特集にあたって
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2025, 7, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集1 第11回臨床哲学フォーラム（研究フォーラム共催イベント）
テーマ「語り継ぐ、水俣と表現」

第11回臨床哲学フォーラム共催イベント 研究フォーラム「語り継ぐ、水俣と表現」特集にあたって

高橋 綾

日時 2023年12月9日（土）14:00～17:00
場所 大阪大学豊中キャンパスCOデザインスタジオ（全学教育総合棟3階）
主催 大阪大学COデザインセンター
共催 大阪大学人文学研究科臨床哲学研究室
協力 大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI）
後援 人文社会系オナー大学院プログラム

【企画概要】

水俣病公式確認から67年、チッソの責任を認めた水俣病一次訴訟の判決から50年、現在も患者さんたちは水俣病とともに生きつづけており、水俣病関連の訴訟も続いています。しかし、患者さんたちの高齢化は進み、日本の近現代史にその負の側面を刻む出来事としての水俣病は、記憶継承の転換期にさしかかっています。

一方で、水俣には、そのような歴史的な大きな出来事としての水俣病ではなく、その土地にくらす人々の生活に起こった出来事としての水俣病について、患者さんの語りを聞き取り、地域で語り継ごうとする水俣病センター相思社のような活動も存在します。また、今回のゲストのお一人、柏木敏治さんは、水俣病に限らず、戦前から続く水俣の人々の暮らしに寄り添い、表現した歌を作り、歌い続けておられます。

水俣病、そして水俣からは、患者・市民運動や訴訟活動だけでなく、映像、写真、文学、歌という表現活動が多く生み出されてきました。これはなぜかと考えたとき、水俣、そして水俣病患者さんは日本の近代化の負の側面を背負わされた「不幸な土地、不幸な人々」であるだけではなく、社会の負の側面をそれぞれの生活の中で生きることによって、独自の知恵と表現を生み出してきた土地、人々でもあるのではないか、ということが思い浮かびます。今回の研究フォーラムでは、水俣病および水俣で生きる人々の語りを語り継ぎ、歌い継ぐ活動をされている、柏木敏治さん、相思社の小泉初恵さんをお招きし、水俣という地域の歴史、地域に暮らす人々の生活としての水俣病を語り継ぐ表現とはどのようなものであるのかを、その表現に触れながらみなさんとともに考えたいと思います。

【プログラム】

「水俣病を語り継ぐ」小泉初恵（水俣病センター相思社）

「マイノリティの〈こえ〉と表現」¹ ほんま なほ（大阪大学COデザインセンター）
 「詩の声、歌の声」 渡邊英理（大阪大学人文学研究科）
 唄と演奏 柏木敏治（水俣在住シンガーソングライター）
 司会ときき手 高橋 紗（大阪大学人文学研究科人文学林）

このフォーラムは、大阪大学の人文社会系オナー大学院プログラムの後援のもと、臨床哲学研究室とCOデザインセンターの共同企画として2023年12月9日（土）に開催されたものです。熊本県水俣市で、水俣の人々の生活を歌う活動をされている柏木敏治さんと、水俣病を生きる人たちの伴走活動を続けている一般財団法人水俣病センター相思社の小泉初恵さんをゲストに迎えて行われました。大学生、大学院生、教員だけでなく、水俣病事件や柏木さんの活動、庶民の生活を歌にすることに关心を持つ一般的の参加者や、コミュニティ音楽に関心を持つ研究者の方まで、さまざまな背景を持つ25名くらいの方に参加をいただきました。

当日は、柏木さんに歌を実際に聴かせてもらう時間と、相思社の小泉さんに水俣病を語り継ぐ活動についてお話を伺う時間を持つほか、COデザインセンターのほんまなほさん、人文学研究科の渡邊英理さんにマイノリティの表現やある地域に伝わる詩歌のような表現活動についての考察をお話ししていただく時間を設けました。こうした歌や声、話の交差を通じ、水俣病患者さんや水俣という地域で生きる人たちの生活やその記憶を表現にして語り、歌い継ぐとはどういうことなのかについて考える時間となったと思います。

まずは、司会の高橋が、相思社小泉さんに、患者さんが高齢化するなど、記憶継承の転換期を迎えている水俣病を語り継ぐとはどういうことなのか、についてインタビュー形式でお話を伺いました。お話しのなかでは、水俣出身ではなく、水俣病の患者運動が盛んで、社会問題としても大きく取り上げられた時期のあとで水俣にやってきた若い世代であるというご自身のお立場も踏まえ、当事者や水俣出身ではない人でも水俣病の記憶継承に関わることはできるし、逆に当事者や水俣出身ではないから見えるものもあるかもしれない、ということや、今大事と思われないものでも、後世の人が意味を見出すかもしれない、一つの視点から取捨選択せずさまざまな記録を残しておくことが重要だと思う、というお話しを伺い、「当事者」の「正統派」の記憶だけを語りつぐのではない、記憶の「複数性」や「多声性」を残していくことの意味について考えさせられました。

また、柏木さんには、小泉さん、ほんまさん、渡邊さんのお話しの合間で、水俣病が問題になる以前の水俣の人々の暮らしを伝える歌、水俣弁の歌、水俣病患者さんと柏木さんが一緒に作った歌などを歌っていただき、水俣や水俣病を生きる人の〈声〉を、実際に柏木さんの声と楽器演奏に乗せて聴かせていただきました。ほんまさん、渡邊さんの両方が〈声〉に言及されていることからもわかるように、柏木さんの活動の意

¹ この特集掲載にあたって、タイトルを「〈こえ〉と輪唱：マイノリティの〈こえ〉と表現をめぐって」と改題されました。

味は、水俣病患者さんや水俣に暮らす人々に、柏木さんが自分の声を貸し、その声をメロディに乗せて歌うことで、聞き手の身体や感情に伝えていく媒体となっている点にあります。水俣病や患者運動の歴史や文字記録が残っていくことも重要ですが、そこに収まりきらない、水俣・水俣病を生きる人々の多様な〈声〉や記憶、感情・情念・生き方を、声や楽器演奏という身体性を媒体にして伝え、響かせていく活動の意味についても考えることができたのではないかと思っています。このフォーラムの報告では、その核心である柏木さんの〈声〉を収録できないことが残念ですが、収録されているほんまさん、渡邊さんの報告のなかにも、詩歌に込められた生活者の〈声〉の響きが聞き取っていただけるかと思います。

(たかはし・あや)